

古墳時代終末期における駿河東部の有力古墳

井鍋 誉之

1 はじめに

原分古墳の埋葬施設は、開口部に段をもつ大型の無袖式石室で、石室内には凝灰岩製の冢形石棺がおさめられていた。原分古墳の石室は、駿河東部において最大級の規模であり、凝灰岩製の石棺をもつ古墳は、本例を含めて6例が知られるにすぎない。本稿では、駿河東部における横穴式石室と石棺について整理するとともに、近隣に所在する長泉町下土狩西1号墳（小野1965）の内容を紹介し、駿河東部における古墳時代終末期の様相について素描することにした。

なお、本稿では、富士川流域から箱根山北麓までの範囲を対象とする。この範囲は、古墳の分布・立地状況から、①富士川西岸域から富士山麓、②愛鷹山麓から黄瀬川流域③箱根山麓の3つの地域に大別できる。このうち、①地域、②地域は横穴式石室を埋葬施設とし、横穴墓は展開しない。いっぽう、③地域は横穴墓と横穴式石室墳が混在する。

2 駿河東部における横穴式石室の変遷

時期区分 本稿では、以下のように時期を区分し、駿河東部の横穴式石室の変遷を整理する。

- | | | |
|--------|---------------|------------------------------|
| 1期 導入期 | 遠江Ⅲ期中葉 | TK43型式期 |
| 2期 展開期 | 遠江Ⅲ期後葉～遠江Ⅳ期前葉 | TK209型式期～TK217型式期（飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期） |
| 3期 変容期 | 遠江Ⅳ期後葉～遠江Ⅴ期前葉 | 飛鳥Ⅲ期～飛鳥Ⅴ期（平城Ⅰ期） |

1期においては①、②地域の一部の古墳に横穴式石室が採用される。石室の導入は遠江、駿河中部より遅れ、遠江Ⅲ期中葉である。

2期にはいると横穴式石室が①～③の全地域に築造されるようになる。大型化する横穴式石室が各地域で散見されるとともに、群集墳の形成が活発である。③地域においては横穴墓の造営が開始される。

3期になると①～③の全地域にわたり、古墳の築造数は減少していく。横穴式石室は小型化、単次葬化がすすむ。さらに②地域において遠江Ⅴ期前葉に石櫃を納めた上円下方墳が造営される（清水柳北1号墳）。③地域では多くの横穴墓が奈良時代にも築造され続け、なかには火葬骨が納められるものもある。

石室形態分類 駿河東部に分布する石室は、基本的に無袖式石室の一系統である。無袖式は玄室と羨道の区別が明確でないものを指す。側壁、開口部の構造から1類から3類まで、3系統に細分する。

1類 開口部に段をもち、玄室床面が横口部分より低くなる石室を1類とする。この石室は、竪穴状の墓坑をもち、天井構造は平天井である。1類の石室は、石室の規模から、さらに2種に分けられる。

1a類 開口部に段をもつ横穴式石室で、石室長4～5mのものを指す。この石室は、①地域を中心とし、②地域まで分布が確認できる。典型例として富士市中原3号墳、4号墳（富士市1994）、富士市東平1号墳（久松1994）、富士市大淵片倉1号墳（志村1983）などの石室が挙げられる。

1期に築造された古墳としては、中原4号墳が相当する。中原4号墳は、駿河東部において最も早く横穴式石室を導入した古墳であると評価できる。中原4号墳の石室は、全長4.3m、幅1.3mと小型である。奥壁は基底部に1石が配置され、基底石も小さい。2段目以上には小型の礫が配される。開口部には小型礫を小口積みにして、段が形成されている。開口部の側壁には大型礫を3段縦積みされる。

2期に築造された古墳には東平1号墳が挙

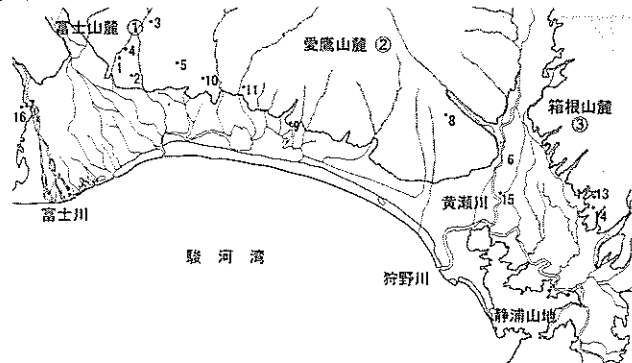


図1 駿河東部の主要古墳分布

げられる。石室は、全長4.7m、幅1.4mである。石室の遺存状況は良好ではないが、奥壁は低い基底石を用い、1石以上で構成される。開口部は小型礫による小口積みである。中原4号墳と東平1号墳は石室規模や奥壁の構造、開口部の構造が類似する（註1）。

3期においても、1a類の石室は、①地域～②地域で多く確認できる。奈良時代になって築造された古墳においても、石室規模には大きな変化がない。なお、3期には、開口部の段構造に、框石状の大型礫を1石設置する事例が多くなる。

1b類 開口部に段をもつ横穴式石室で、石室長7m以上のものを指す。こうした大型の石室は、①～②地域に認められる。類例として原分古墳が挙げられるほか、富士市横沢古墳（志村1981）、富士市実円寺西1号墳（平林1987）が含まれる。いずれも直径20m級の円墳である。

1期に築造された古墳には、横沢古墳がある。横沢古墳は、石室長8.3mであり、奥壁には大型石材と両側に配された小型石材で構成される。石室幅は2.3mと大きい。また、わずかではあるが、前庭側壁がつく。開口部には段を有するものの大型礫の設置はみられず、段の上に閉塞石が設置される。

2期に築造された古墳として、原分古墳をはじめ、実円寺西1号墳が挙げられる。いずれも石室平面形は矩形である。奥壁は2石あるいは1石で構成される。開口部の段は大型石材が1石～2石が配置され、その上に閉塞石が設置される。側壁の開口部では大型石材が垂直に3段積みされている。前庭側壁は長大化し、原分古墳のようにハ字形に開く構造をもつものがある。

3期以降では石室長7m以上の大型の石室はみられない。

2類 玄室と羨道の区別がみられない石室を2類とする。石室平面形は矩形で、平天井である。石室長に対し、石室幅が狭く、長大なものが多い。2類の石室は①～③の全域で認められ、典型例として沼津市清水柳北2号墳（鈴木1989）、富士市船津寺ノ上1号墳（平林1987）、富士市大阪上古墳（後藤1958）などの石室が挙げられる。

1期に築造された古墳としては、清水柳北2号墳が該当する。清水柳北2号墳の石室は、全長5.25m、幅0.9mである。石室内には組合式箱形石棺がおさめられる。奥壁は基底石に大型石材を用い、上段には小型礫を積み上げている。平面形は矩形である。

2期に築造された古墳としては、船津寺ノ上1号墳が相当する。当墳は墳丘の直径が22mである。石室長約12.5m、奥壁寄り幅1.4m、高さ1.25mである。石室構造は地下式で、石室平面形は開口部に向かって狭くなる台形である。墓坑上面に天井石が架構される。奥壁には低い基底石を配し、上部には小型の礫が数段積み上げられる。開口部には扁平な石が3段ほど垂直に積み上げられる。このような異様ともいふべき狭長な石室は後続しないが、2期以降も石室長8m、幅2m前後の大型の石室が①～③地域で散見される。なお、3期においても、2類の石室は、規模を縮小しながらも継続的に築造される。

3類 開口部に立柱石をもつ無袖式石室を3類とする。石室前面には側壁が設置されず、立柱石は石室内側に張り出さない。石室平面形は矩形のものや、わずかに胴張りを呈するものがある。3

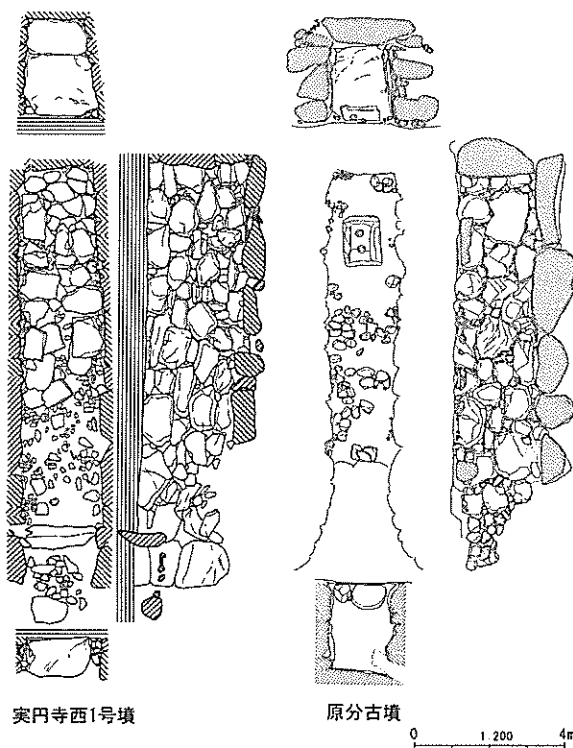


図2 実円寺西1号墳と原分古墳

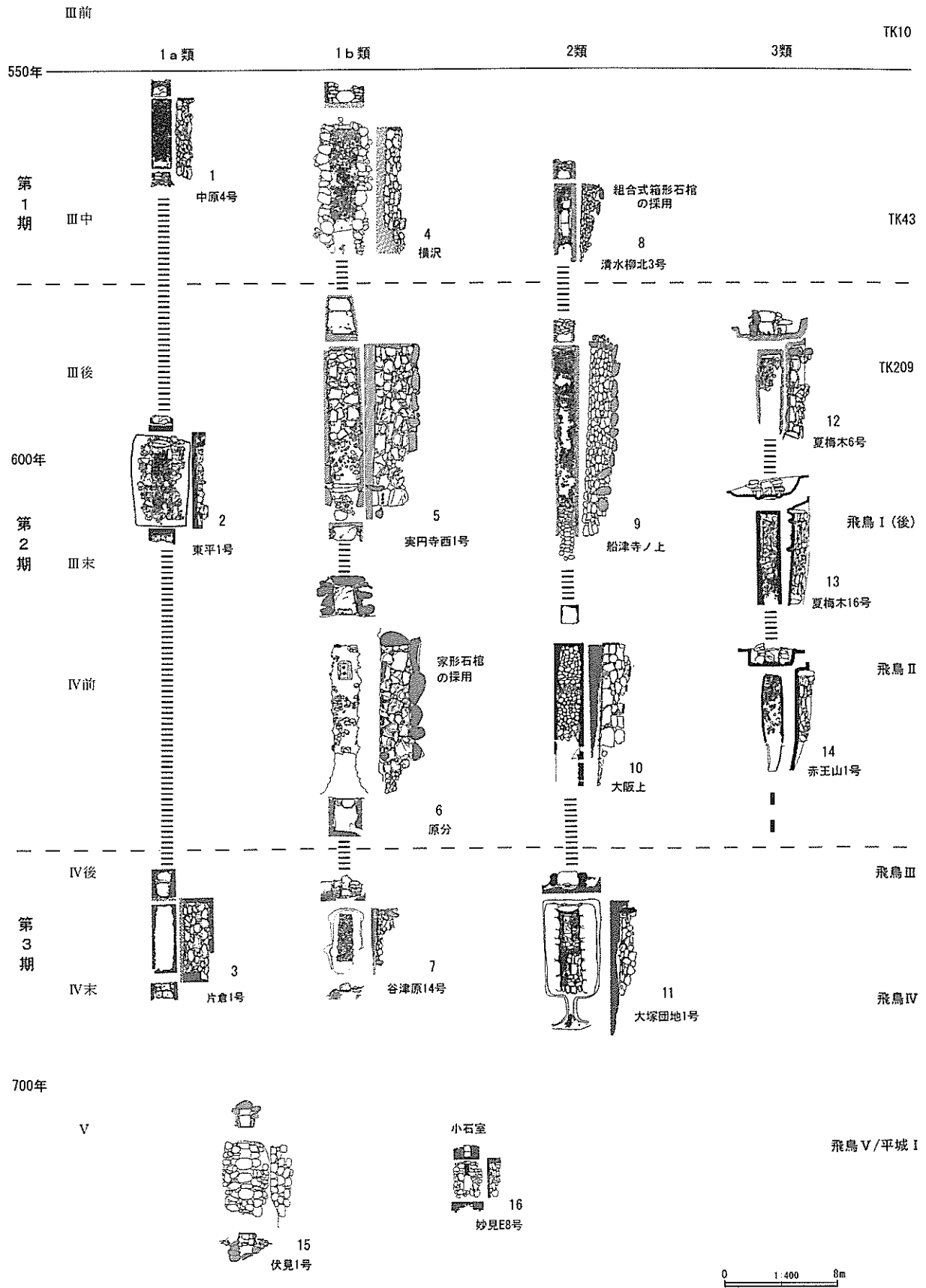


図3 駿河東部の横穴式石室の変遷

類の石室は③地域を中心に築造されており、一部②地域の愛鷹山東麓まで広がりをみせている。

3類の石室の導入は2期において確認できる。典型例として、三島市夏梅木6号墳、16号墳（鈴木2000）、三島市田頭山3号墳（井鍋2004）、沼津市清水柳北3号墳（鈴木1989）の石室が挙げられる。これらの石室の全長は、5m～6m前後、幅約1.5mである。奥壁は2石で構成される。立柱石は側壁2段分に相当する高さで、両側壁あるいは片側の側壁に配される。立柱石は、袖の意識の表れとともに、石室構築における指標石としての性格を持ち合わせていると考えられる。

石室変遷の特徴 1期では、1a類と2類が、ともに石室長が5m前後で、奥壁の構造も共通している。両系統の石室には、共通の規範が存在していたことがうかがえる。これらの石室の系譜関係については、いまだ明らかにし得ないが、奥壁と開口部の造作から三河の無袖式石室との関連が指摘できる。

2期にはいると、1類、2類の石室は石室規模が拡大し、狭長化していく様子が見出せる。奥壁は1石ないし2石を用い、開口部側の側壁の積み方は大型礫を縦積みするなど共通点が見出せる。また、前庭側壁が長大化していく様子が認められる。大型石室を内包する直径20m級の古墳は、①～②地域の各所で認められるが、突出した規模の古墳は見られず、等質的である。

なお、③地域では開口部に立柱石をもつ3類の石室が導入される。石室平面形はやや胴張りを呈することから、同様の特徴をもつ石室が築かれる駿河以西の影響を受けている可能性が指摘できる。

原分古墳例の位置づけ 原分古墳の横穴式石室は、駿河東部でも上位階層の古墳が採用したI b類に属し、石室規模においても、駿河東部各地の石室との比較を通じて、大型の部類に入ることが判明する（図3）。石室の構造から導き出せる帰属時期は、本稿でいう2期（飛鳥I期～飛鳥II期）にあたり、駿河東部においては横穴式石室の規模が最も大きくなる段階に相当する。また、石室形態、石室規模、開口部にみられる造作など、実円寺西1号墳との共通性が高く、両者は、築造時期や被葬者の階層的位置などが近似すると捉えられる。副葬品組成が不明瞭であったI b類の横穴式石室の具体的内容を示すものとして、原分古墳の調査成果がもつ意義は大きいと評価できよう。

3 駿河東部における石棺の特徴

駿河東部の後期、終末期にみられる棺としては、石棺と釘付木棺がある。石棺は板状節理をもつ安山岩、もしくは、白色凝灰岩を用いている。安山岩は、組合式箱形石棺に用いられ、②～③地域の古墳に多く認められる。白色凝灰岩製の石棺は、②地域の黄瀬川流域から狩野川流域、田方平野南部の一部において確認できる。とくに、原分古墳が所在する黄瀬川流域の古墳には白色凝灰岩製の石棺をもつ石室が集中する。

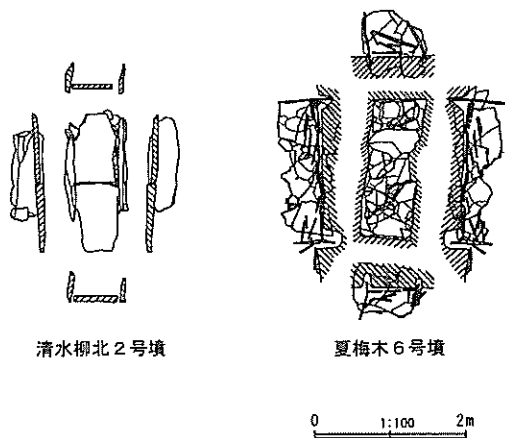


図4 組合式箱形石棺の諸例

安山岩製の石棺 安山岩で構成される棺はすべて組合式箱形石棺である。安山岩製の組合式箱形石棺は、駿河東部では71例が確認できる（井鍋2005）。分布は②から③地域の範囲に認められる。石棺材の安山岩は、②地域、③地域のほかに、天城山麓などで産出されるものがある。板状節理が発達した安山岩は、地元では「ヘギ石」と呼ばれ、板石として加工しやすい。

組合式箱形石棺は、長側石の継ぎ方から、平継ぎと重ね継ぎの2種に分類できる（井鍋2004）。横穴式石室への導入は沼津市清水柳北1号墳例が初現例である。この古墳に採用された組合式箱形石棺は、当地域では珍しい平継ぎである。初現例の組合式箱形石棺が

例外的に平継ぎであることから、横穴式石室導入以前にも、平継ぎの組合式箱形石棺を埋葬施設としていた可能性が指摘できる。それ以外の組合式箱形石棺はすべて重ね継ぎで、形態による階層差は認められない。

白色凝灰岩製の石棺 白色凝灰岩製の石棺には刳抜式と組合式がある。駿河東部では6例確認されている。白色凝灰岩製の石棺は②地域から狩野川流域の横穴式石室、③地域の横穴墓に認められる。当地域の白色凝灰岩は、通称「伊豆石」と呼ばれ、原分古墳石棺をはじめ、長泉町山ノ神道古墳石棺（平野1976）、下土狩西1号墳石棺はいずれも、沼津市江ノ浦産の石材を使用したとされる【第2部 構造解析編 pp.79-88】。

棺蓋がわかるものは5例あり、四辺傾斜のものと、二辺傾斜のものが認められる。このうち、原分古墳例は刳抜式であり、四辺傾斜で突起をもつ、狭義の「家形石棺」に相当する（増田2004）。復元案では長辺6、短辺2の8突起を示した。同様に、8突起を有する家形石棺は、静岡市賤機山古墳（後藤・斎藤1952）や静岡市駿河丸山古墳（望月編1962）に類似がある。縄掛突起数から駿河中央部の首長層と共通する棺をもつ可能性が指摘できる。

山ノ神道古墳は二枚継ぎの家形石棺で、無突起である。下土狩西1号墳例は二辺傾斜の石棺で、短辺部に円形の突起を有する（註2）。これらは畿内における型式変化を辿ることができず、在地的な形態に変化した石棺として捉えることができよう。

原分古墳例の位置づけ 原分古墳におさめられた凝灰岩製の刳抜式家形石棺は、8突起を有すると想定した。この石棺は、築造時期が原分古墳より遡るものの、駿河中央部の賤機山古墳や駿河丸山古墳の家形石棺との類似性が認められる。刳抜式の家形石棺は、駿河東部では初例であるが、本例の出土によって、駿河東部における凝灰岩製の石棺は、駿河中央部との関係によって導入された可能性が高い。原分古墳例が駿河東部の凝灰岩製の石棺の中でも初現的な事例であり、有力階層が備える棺としてふさわしいことがうかがえるだろう。賤機山古墳や丸山古墳は畿内に遡源がたどれる横穴式石室をもち、駿河中央部における優位性は動かしがたい。最有力の賤機山古墳に採用された家形石棺を模して、丸山古墳の石棺が製作されたと捉えられ、さらに地域を越えた伝播事例として原分古墳の家形石棺を位置づけることができる。原分古墳の横穴式石室は駿河中央との関連を見出し難いが、石棺において駿河中央部の

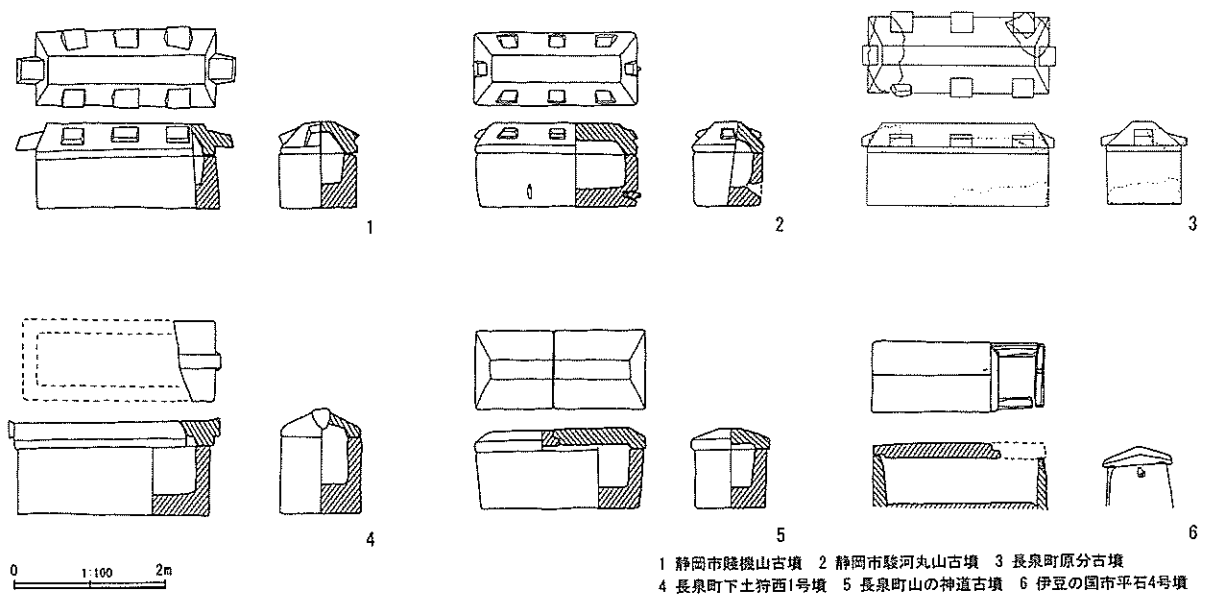


図5 白色凝灰岩製の石棺の諸例

有力階層との関係が見出せることは、原分古墳の被葬者が置かれた社会的位置を捉える上で注目できる。さらに、石棺形態の情報の淵源として、畿内中枢部を視野に入れる必要もある事例といえる。

4 原分古墳と下土狩西1号墳にみる共通性

原分古墳の被葬者が置かれた社会的位置を明確にするためには、近隣地域の古墳との比較検討が必須である。ここでは、原分古墳と至近距離にあり、墳丘規模、石棺、副葬品組成などに共通性が高い下土狩西1号墳を取り上げ、その内容をやや詳しく検討しておこう。なお、下土狩西1号墳の副葬品は、長らく全貌が不明瞭であったが、原分古墳にかかわる整理作業と併行して基礎的な状態確認調査、写真撮影を実施し、その成果の一部を本書に収めた【第1部 調査報告編 図版82～88】。

石室 下土狩西1号墳は長泉町下土狩に所在する。原分古墳より北東方向へ500mの位置にある。調査は1962年の3日間にわたり実施された(小野1965)。報文によれば、墳丘は、直径20mの円墳とされる。石室の残存状況は良好ではなく、基底石のみが遺存している状態であった。石室形態は無袖式石室である。ただし、開口部は、閉塞石が積み上げられた状態のみが図化されており、詳しい構造が不明瞭である。玄室から入り口に向かって上り坂であることから、開口部に段がついていた可能性も否定できない。石室規模は石室長10m、幅2mとされるが、実測図をみる限り、開口部には側壁より小型の石材があることから前庭側壁が接続していた可能性が高い。この前提をふまえると、玄室の全長は7m程度であったと考えられよう。開口部の造作が明確ではないが、全長7mと規模が大きいことから、先述の石室分類では、1b類もしくは、2類に相当する。

玄室の全長が7m程度であることは、原分古墳と共通する。また、奥壁は抜かれているが1枚石で構成されることが明らかになっている。これらのことから、下土狩西1号墳の石室は、駿河東部では大型の部類に属し、原分古墳の石室と構造や規模が類似していることが分かる。

石棺 下土狩西1号墳では、奥壁よりに白色凝灰岩製の石棺が配置されていた。棺蓋は全体の1/4程度残存している。この石棺は、先述のとおり二辺傾斜のもので、短辺に円形の突起がつくものである。白色凝灰岩製の石棺をもつ点も、原分古墳と共通し、駿河東部の有力墳に共有される属性といえる。

築造時期 下土狩西1号墳の石室内から出土した須恵器は、最も古いもので遠江Ⅳ期前葉(飛鳥Ⅱ期併行)である。7世紀中葉という初葬の時期も、原分古墳とほぼ同一時期といえるだろう。

副葬品 石棺内からは、大刀、耳環、玉類が出土した。また、石棺外の遺物出土位置は、石棺と奥壁の間、石棺前の2箇所に分けられ、須恵器や大刀、馬具などが出土した。副葬品は、それぞれ詳細な出

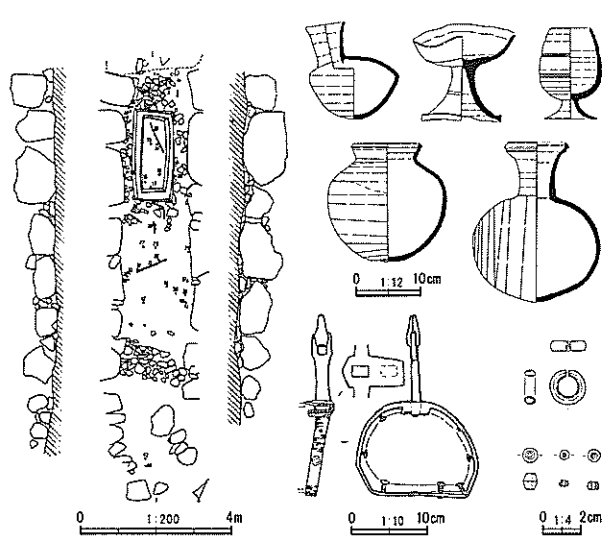


図6 下土狩西1号墳 関連資料

土位置が不明なものが含まれるが、須恵器11点以上、土師器3点以上、馬具1組分、大刀3点、小刀1点、鉄鏃14点以上、弓金具2点、耳環5点、玉類31点が確認できる。また、棺装具として鉄釘も4点認められる。

須恵器の内訳は、平瓶2点、広口壺2点、フラスコ瓶2点、脚付盃1点、高坏1点、高台坏1点、摘蓋1点があり、土師器は坏、埴がある。これら土器類は、上層、中層、下層の3層から出土しており、遠江Ⅳ期前葉(飛鳥Ⅱ期併行)～遠江Ⅴ期前葉(奈良時代)に位置づけられる。

下土狩西1号墳からは馬具や武器が豊富に出土した。馬具には、環状鏡板付轡1点と、壺鍔2点、

帯飾金具1点がある。壺鐙は、柄や、輪部、踏込が金属製壺鐙と同一のもので、有機物製の胸板を備える。形態的には、原分古墳から出土した1号鐙と同一系譜に連なるものである。

大刀には、金銅装頭椎大刀1点、銀装大刀1点、金銅装大刀1点が認められる。頭椎大刀は、柄頭、鏢、鞘尻金具、柄間金具などが遺存している。銀装大刀は遺存状況は良好ではないが、銀製釦をもつ。金銅装大刀の形式は不明であるが、金銅製の鞘口金具、鞘尻金具が遺存する。

鉄鏃は14点分が遺存している。平根式の三角形鏃や柳葉形鏃の8点を中心に詳細な形態がわかるが、茎の存在から、尖根式鉄鏃も一定量含まれていたことがうかがえる。

弓金具は2点が確認できる。銅製の軸に鉄製の筒を有するもので、両頭部には鍍金が施されていた。金銅装の弓金具は類例が少なく、貴重である。なお、銅製の軸に鉄製の筒を有する構造は、原分古墳の弓金具1類と共通する。

釘付木棺 副葬品鉄器と混在して、鉄釘が確認できた。下土狩西1号墳には、石棺以外に、釘付木棺が用いられていたことが分かる。石棺と釘付木棺という組合せも原分古墳と共通する。釘付木棺の存在が確認できる古墳例は少なく、駿河東部では、原分古墳や下土狩西1号墳のほかに、伊豆ノ国市大北34号横穴墓（斎藤編1981）に認められる程度である。遠江でも鉄釘が出土する古墳は少なく、25例を挙げうるに過ぎない（大谷2003）。釘付木棺は、有力階層の棺として用いられる傾向があり、駿河東部においても同様の性格が指摘できる。

下土狩西1号墳の位置づけ 以上、下土狩西1号墳の内容を簡単に紹介してきたが、築造時期だけでなく、墳丘規模、石室、石棺、釘付木棺、副葬品組成など、原分古墳との類似点が非常に多いことは容易に了解できるだろう。両古墳に葬られた被葬者は、経済的な実力、職掌、地域社会での役割など、共通項が多かったと想定できる。原分古墳と下土狩西1号墳は、500m程度しか離れていない至近距離に相次いで築造されていることの意義を改めて評価する必要がある。黄瀬川流域の地域社会に根ざす人びとが置かれていた特殊な役割が、7世紀中葉の有力古墳を林立させる要因であったといえる。両古墳が示す豊富な副葬品からは、その特殊な役割に、畿内中枢が密接にかかわっていたと推測できる。

5 結語

当地域の石室形態を3種に分類し、検討した。導入期における石室は小型であるが、2期以降、実円寺西第1号墳や原分古墳、船津寺ノ上1号墳にみられるように各地に直径20m級の古墳が構築され、横穴式石室も大型化する。これらの古墳は、地域における上位階層に位置づけられるものの、石室形態や規模による階層差は見出しにくく、等質的である。

原分古墳の家型石棺は縄掛突起を有しており、黄瀬川流域では初例である。突起数は8個が想定され、駿河中央部の賤機山古墳、駿河丸山古墳でみられる家形石棺と共通するものである。駿河中央部における最有力古墳と共通する家形石棺を内包することは、原分古墳例の優位性を雄弁に物語るといえる。いっぽう、鉄釘は原分古墳、下土狩西1号墳において確認できる。釘付木棺が存在する可能性が指摘でき、凝灰岩製の石棺と釘付木棺が用いられることは、有力墳に共通する埋葬方法であった可能性が高い。

組合式箱形石棺をもつ小型の無袖式石室が多く確認できる駿河東部において、7世紀前半代を通じて、原分古墳をはじめとした有力階層の古墳では石室の大型化が進行し、地元産の白色凝灰岩を用いた石棺が採用される。石室の大型化、凝灰岩製石棺の採用により、地域内の階層秩序が明確に表現されるようになる。駿河東部においても、古墳における地域秩序が表出した事象として捉えることができる。

駿河東部では、最上位に位置する石室は見出しにくいものの、7世紀前半の上位階層の古墳には大型の無袖式石室が採用され、豊富な馬具や装飾付大刀が副葬された。また、有力古墳には、凝灰岩製の石棺や釘付木棺が用いられることもあった。駿河東部の有力古墳はそれぞれに個性があるが、地域全体と

しての共通性も高い。原分古墳と下土狩西1号墳の類似は、駿河東部の地域社会に住む人びとが置かれた共通の社会的状況を明確に示しているとともに、その背景には倭王権の地域支配方式が転換された事象として捉えることができる。黄瀬川流域における石棺をもつ古墳の被葬者には、駿河中央部の首長との関わりや倭王権との結びつきをあらたに強めた新興の小首長層の姿をみることができよう。

註

1 中原4号墳からは鉄鉗といった鍛冶具、U字鋏先、針、象嵌剣などの豊富な鉄製品が出土し、後続する東平1号墳からは象嵌大刀、銅製壺蓋、丁字形利器が認められる。両古墳は、象嵌の刀剣類、馬具など、共通する副葬品組成をもつ。なかでも丁字形利器は全国で3例確認されているが(久松1994)、そのうち2例は駿河東部の古墳からの出土品である。時代は下るものの、多賀城住居跡SI2300工房跡からも同様の利器が出土している(多賀城跡研究所1995)。鍛冶具の出土や鍛冶工房から出土している丁字型利器の存在から、両古墳とも鉄器生産にかかわる被葬者が想定される。

2 下土狩西1号墳の石棺は「大師山横穴群」のなかで棺身のみ実測図が掲載されている。今回、原分古墳の移築復元に伴い、下土狩西1号墳の石棺を実見する機会を得て、棺蓋が存在することが判明した。長泉町教育委員会の廣瀬氏に確認したところ、写真からも棺蓋が確認することができた。報文にある鮎壺の石棺と規模・形態の特徴が同じであることから実測図が入れ替わって掲載された可能性が高い。よって、本稿では従来鮎壺の石棺とされる実測図を下土狩西1号墳の石棺として掲載した。

参考文献

- 稲垣甲子男 1980 『駿河妙見古墳群 静岡県富士川町室野坂・妙見古墳群調査報告書』 富士川町教育委員会
井鍋誉之 2003 「東駿河の横穴式石室」 『静岡県の横穴式石室』 静岡県考古学会
井鍋誉之 2004 『田頭山古墳群』 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
井鍋誉之 2004 「東駿河・伊豆における律令墓制の展開」 『財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所 設立20周年記念論文集』
井鍋誉之 2005 「組合式箱形石棺をもつ横穴式石室」 『研究紀要』 第11号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
岩原 剛 2008 「三河の無袖式石室の様相」 『東国に伝う横穴式石室-駿河東部の無袖式石室を中心に』 静岡県考古学会
大谷宏治 2003 「大屋敷C古墳群・大屋敷1号窯 第1分冊」 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
小野真一 1965 「第3章 古代社会 第1節 古墳文化」 『長泉郷土誌』 長泉町教育委員会
菊池吉修 2008 「駿河における横穴式石室」 『東国に伝う横穴式石室-駿河東部の無袖式石室を中心に』 静岡県考古学会
後藤守一・斎藤 忠 1952 『賤機山古墳』 静岡市教育委員会
後藤守一・中野国雄 1958 『吉原市の古墳』 吉原市教育委員会
齊藤 忠(編) 1981 『大北横穴群』 伊豆長岡町教育委員会
志村 博 1981 『西富士道路(富士地区)岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市教育委員会
鈴木敏中 2000 『夏梅木遺跡群』 三島市教育委員会
多賀城跡調査研究所 1995 『多賀城跡第66次調査宮城県調査研究所 年報』
長泉町教育委員会 1965 『長泉郷土誌』
久松義昭 1994 『東平1号墳発掘調査概報』 富士市教育委員会
平野吾郎 1976 『大師山横穴群』 伊豆長岡町教育委員会
平林将信・川上敏朗 1986 『実円寺西古墳保存修理工事報告書』 富士市教育委員会
平林将信 1987 『船津寺ノ上第1号墳 発掘調査報告書』 富士市教育委員会
増田一裕 2004 「家形石棺の基礎的分析(下)」 『古代学研究』 164 古代学研究会
望月薫弘(編) 1962 『駿河丸山古墳』 静岡市教育委員会
渡井義彦(編) 1988 『富士市の埋蔵文化財(古墳編)』 富士市教育委員会

図出典

図1 筆者作成 図2 実円寺西第1号古墳:平林将信・川上敏朗 1986 『実円寺西古墳保存修理工事報告書』 富士市教育委員会再トレース原分古墳 本書掲載図 図3 筆者作成 1:(富士市1994) 2:(久松1994) 3:志村 博 1983 『大湖片倉1号墳』 富士市教育委員会 4:志村 博 1981 『西富士道路(富士地区)岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市教育委員会 5:(平林将信・川上敏朗1986) 6:本書掲載図 7:井鍋誉之編 2001 『富士川SA関連遺跡』 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 8:(鈴木1989) 9:(平林1987) 10:後藤守一・中野国雄 1958 『吉原市の古墳』 吉原市教育委員会 11:植松章八 1976 『中里大塚団地塚古墳』 富士市教育委員会 12:(鈴木2000) 13:(鈴木2000) 14:(鈴木1998) 15:小野真一 1971 『伏見古墳群-駿豆地方に於ける終末期古墳の研究』 加藤学園沼津考古学研究所 16:稲垣甲子男 1980 『駿河妙見古墳群 静岡県富士川町室野坂・妙見古墳群調査報告書』 富士川町教育委員会 図4 下記文献より再トレース 清水柳北2号墳:(鈴木1989) 夏梅木6号墳例:(鈴木2000) 図5 下記文献より再トレース 賤機山古墳:後藤守一・斎藤 忠 1952 『賤機山古墳』 静岡市教育委員会 駿河丸山古墳:望月薫弘(編) 1962 『駿河丸山古墳』 静岡市教育委員会 原分古墳:本書掲載図 下土狩西1号墳:平野吾郎 1976 『大師山横穴群』 伊豆長岡町教育委員会 山ノ神道古墳:(平野1976) 平石4号墳:(平野1976) 図6 下土狩西1号墳 石室実測図:小野真一 1965 「第3章 古代社会 第1節 古墳文化」 『長泉郷土誌』 長泉町教育委員会 出土須臾器 装身具 再実測・再トレース